

〈研究ノート〉

教職志望学生が「三容器の協力関係」から学んだ 「いじめ問題」に立ち向かう知恵 —受講学生の小論文を研究資料として—

土 井 進

要 約

本稿は、教職科目「教職概論」「教育学概論」の教材として取りあげた『塵劫記』(じんこうき)¹⁾の「三容器の協力関係」を通して、教職志望学生が生徒指導力を高めるどのような知恵を汲み取ることができたのか、を明らかにした実践報告である。

学生は、若い感性で「協力」ということの本質について深く考察し、自らの「いじめ」体験を踏まえて生徒指導力を高める知恵を修得した。その内容は、次の通りであった。①周りに流されない強い意志を育てる。②役割を共有し平等意識を育てる。③不器用でも優しい人はいる。④一人を仲間外れにしたのでは問題解決ができない。⑤3人だからこそできる新たな可能性。⑥人と「協力」して物事に取り組む大切さ。⑦他の人が動いてくれているから事が成る。⑧自己の容量(資質能力)の精一杯を発揮して責任を果たす。

キーワード

いじめ問題 生徒指導力 三容器の協力関係 高田豊寿 周禮研究会

1. 研究の目的

筆者は、平成26年度に本学人文学部歴史学科に教職課程担当教員として着任した。1年次生の「教職概論」の授業計画(シラバス)の第12回目に「いじめ問題」を取り上げ、次のように提示した。

「三容器の協力関係」という問題は何を教えているか—「いじめ」「不登校」問題に立ち向かう知恵—(事前学習)「協力し合う学級」を作り上げるためにあなたはどのように取り組むか。200字原稿用紙いっぱい丁寧に字で書く。(授業内容)「三容器の協力関係」という算数の問題を解きながら、そこに込められた「協力」の意義について理解する。この問題から得られる示唆をもとに、「いじめ」を起こさない学級づくりについて小グループでディスカッションする。(事後学習)「三容器の協力関係」から得られる示唆をもとに、「いじめ」を起こさない学級づくりについて考察し、200字原稿用紙いっぱい丁寧に字で書く。(参考文献等)吉田光由著『塵劫記』

筆者はまた、千葉キャンパスにおいて総合福祉学部1年次生の「教育学概論」も担当している。この授業においても「いじめ問題」に立ち向かう生徒指導力を高める知恵を汲み取るために、『塵劫記』の「三

容器の協力関係」を教材とした。

本稿は、「教職概論」²⁾(平成27年度、39名)と「教育学概論」³⁾(平成27年度、99名)を受講した1年次生が、「三容器の協力関係」という教材からどのような生徒指導力を高める知恵を汲み取ることができたのか、を明らかにすることを目的とする。

2. 困難な「いじめ問題」に立ち向かう教師の生徒指導力

(1) 「いじめ研究会」から得た知見

筆者は「いじめ問題」に対処できる教員の養成を目指して、1995年(平成7年)11月から1997年(平成9年)9月まで、信州大学教育学部附属教育実践研究指導センターにおいて「いじめ研究会」⁴⁾を26回開催した。「いじめ問題」という国民的な教育課題に深い関心を寄せた市民、学生、研究者の皆さんが熱心に参加され、事例発表や研究発表をしていただいた。この研究会を主宰した筆者が心に刻んだ知見は、次のようなことであった。

多くの方々のお話を聞くにつけ、人間の心に、そして社会に深く根ざしている「いじめ」という行為の恐ろしさ、悲しさを思い知らされる。「いじめ問題」は人間社会のあるところ、どこでも起こりうる終わりのない問題である。「いじめ問題」は誰もが当事者であり得るのであるが、自分の顔を自分で見ることができないように、この問題については意外に「わかっていない」ことが多いといえよう。まず、「いじめ問題」について「知る」ことが重要であり、次に知ったことをもとに実践し、自己の生き方を高めていくことが解決への糸口となると考える。⁵⁾

学校教育現場において増加、陰湿化の傾向をたどっている「いじめ問題」は、学校だけの力で解決することはもとより困難であるが、学校を舞台として起こっている以上、教師の対応如何によって未然に防ぐことができる部分もかなりあると筆者は考えている。平成27年に岩手県盛岡市で中学生がいじめを苦に自殺するという痛ましい事件が起こった。この事件においては、明らかに教師の「いじめ問題」に立ち向かう生徒指導力に問題があったと言わざるを得ない。この事件をうけて文部科学省は平成27年8月に、全国の教育委員会に対して「いじめ」の実態調査のやり直しを命ずるという異例な事態に発展した。

教師が「いじめ」を早期発見し、未然に防ぐためには、児童生徒の内面に迫る生徒指導力を高めていくことが重要な鍵となる。筆者は上述の「いじめ研究会」を運営するなかで、教師が自己の生き方を高め生徒指導力の向上を図ることが、「いじめ問題」に立ち向かう鍵になると考え、次のように論じた。

これからの教師に求められることは、児童生徒一人ひとりが何を渴望しているのか、その心を素早く受け止めることのできる力量である。健常児の中で生活しているハンディキャップを持った子どもがどんな思いで過ごしているか、聴力や視力に障害をもつ子どもが、思うように自己表現ができず、周囲の子どもたちと比較してどれほど深い苦痛や悩みに耐えているか、その心を深く感じ取ることのできる感性が教師に求められている。教師は一人ひとりの児童生徒を生かす視点に立って、子どもの生きがいを実現するとともに、人間の弱さも受容できる人間的な力量を身に付けていかなければならない。これからの我が国の学校教育を担う教師には、一人ひとりの子どもの成長に深く関わっていくという誠実な姿勢と専門職としての力量が強く要請されていることを銘記しなければならない。⁶⁾

(2) 「いじめ」の定義

「いじめ」に相当するとされる英語bullyingは、弱い者いじめをすることをいう。弱い者をかばってやるのではなく、かえっていじめるという卑怯な振る舞いが我が国の学校教育現場で顕著になったの

は、1984年(昭和59年)から翌年にかけて、「いじめ」が原因で児童生徒が自殺するという事件が起こってからである。それ以来、学校にスクールカウンセラーが配置されるなど様々な対応策が講じられてきているが、一向に減少していないところにこの問題の根深さがある。

いじめは、被害者も加害者も入れ替わりながら進行している。小学校4年生からの6年間(調査12回)をみると、週に1回以上の被害が12回継続した者はいない一方、被害経験が全くなかった者は13.0%に過ぎない。同様に、週に1回以上の加害が11回以上継続した者はいない一方、加害経験が全くなかった者は12.7%に過ぎない。⁷⁾

それにも関わらず、本校における「いじめ」はゼロであると報告している学校が存在するのである。筆者が担当している教職科目の受講学生のほとんどが、「事前学習」や「事後学習」の200字原稿の中で、自らの「いじめ」体験を赤裸々に記述している。このように我が国の学校教育現場に蔓延している「いじめ問題」の解決への鍵を握っているのは教員をおいてほかにはないと考える。筆者もお茶の水女子大学附属中学校に勤務していたときに、生徒が自殺したいと訴えるほどの深刻な「いじめ問題」に直面し、教師生命を賭けて真剣に立ち向かったことがある。

これから教職を志す学生にとって、「いじめ問題」への生徒指導力を高めることは、実践的指導力の基礎として不可欠な資質能力である。森田洋司(1986)は、「いじめとは同一集団内の相互作用過程において優位に立つ方が、意識的にあるいは集散的に他方にたいして精神的・身体的苦痛を与えることである。」⁸⁾と定義している。また、文部科学省(2006)は「いじめ」を次のように定義している。「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているものとする。なお、起こった場所は学校の内外を問わない。」⁹⁾この両者の定義に共通していることは、「いじめ問題」は「いじめを行う者」と「いじめを受ける者」、そして「それを傍観している者」の3者が存在するということである。

(3) 共感的理解から生まれる生徒指導力

教師には、「いじめ問題」に正面から立ち向かい、解決に導くことができる生徒指導力が求められる。教師の職務には教科指導と生徒指導がある。学校の全教育活動において発揮される生徒指導力は、実践的指導力の根幹をなすものといえよう。教師の生徒指導力が有効に発揮されるためには、教師が児童生徒に自己決定の場を与えること、児童生徒に自尊感情を与えること、そして、児童生徒との共感的理解を深めることが重要である。この共感的理解の特質について、坂本昇一(2014)は、教師と児童生徒の相互性、できるだけ同じ立場に立とうとする同位性、人間対人間の人間性、そして一切の道具や用具などを使用しないという直接性がある、と指摘している。¹⁰⁾

また、信州の教育者 中川弘泰は、「いじめ」の根絶を願って執筆した著書において、「感性を発揮して子どもたちの心を高めて豊かな人間に導いていくのが教師の役目である。優れた教師は、いじめを見逃さず、厳しく立ち向かい、人間のあるべき道を身をもって示す。」¹¹⁾と述べている。

本稿においては、「いじめ問題」の解決に立ち向かう教師が、共感的理解に基づいて発揮する実践的指導力を生徒指導力と呼ぶことにする。

3 「いじめ問題」に対する淑徳大学1年生の認識

授業の「事前学習」や「事後学習」において人文学部の学生が記述した「いじめ問題」に対する考察は、A：自己自身、B：教師、C：学級全体の3つの観点に大別される。次に各観点の代表的な事例を

学生の記述内容のまま取り上げる。

- A① 「いじめ」は良くないことだと分かっているのに、中々無くならないのはなぜか。私は小学生の時に、いじめたこともあり、いじめられたこともある。その経験から学んだことは、人をいじめても得することはない。むしろ、損することばかりだった。子どもたちにこのことに気づいてほしい。私は子どもたちが正義感あふれる気持ちをもって成長できるように導くことができる教師になりたい。(男子学生)
- A② いじめる生徒にいじめられるという経験をさせる。いじめについても勉強させ、なぜいけないのかを分からせる。不登校になる前に、頼る相手を作らせたり、紹介したりする。(女子学生)
- A③ 「いじめ」は、いいことなんてない。「いじめ」はやった方にもやられた方にも原因があると思う。私もいじめられたことがある。全然楽しくない。何が楽しいのかわからない。相手がいじめをやめないなら自分が変わればいい。明るくなればいい。(男子学生)
- B① 私は「いじめ問題」は、永遠に消えることがない最大の問題と考えている。「いじめ問題」は、人と人との関わりにより生じる摩擦のようなものから始まると思う。これは誰もしが体験することであろう。「いじめ問題」を解決するには、問題を発生させた本人たちの努力はもちろんであるが、私は教師の指導が不可欠であると思う。教師には実践的指導力が必要である。(女子学生)
- B② 私は生徒一人一人の心のケアを大事にする。生徒一人一人に声をかける。いじめ・不登校の原因は、人に見放され、見捨てられることだと考える。人の荒んだ心によって、「いじめ」・不登校が生まれる。毎日先生が生徒の心のケアを欠かすことがなければ、なくなるはずだ。(女子学生)
- B③ 「いじめ」やそれに近いことは、どこでも自然に起こってしまう。それを防ぐにはやはり、教師の力が必要になってくる。まず、なるべく生徒の近くにいることが大切である。教師が授業時間以外は教室にいないということになると、「いじめ」は起こりやすくなると思う。教師が相談できる場を提供することが大事である。(男子学生)
- B④ 私は、教師の立場だけで「いじめ」や不登校を完全になくすのは不可能だと思っている。学校教育の場での主役はあくまで児童や生徒なので、教師の力だけでは不可能である。そこで、「いじめ」・不登校のない学級をつくるのは児童生徒の人間性の育成にかかってくると思う。人は遅かれ早かれ過ちに気づく時が来る。その気づきの手伝いをするのが教師にできることだと思う。自らの気づきでしか自らの過ちは正せない。(女子学生)
- B⑤ 私は、先生が生徒にどれだけ関わりを持つかが重要だと考える。生徒の心の懐に入り、生徒の心の状態を常に知るようになれば、クラスの状態も知る事ができるので素早い対応が取れるからだ。生徒とたくさんの時間を共にし、生徒が学校を楽しんでいるようになるには、先生がどれだけ生徒の為に動けるか、が重要だ。(男子学生)
- 4 B⑥ 「いじめ」をなくすために、私は臍貞をしない。教師の臍貞は良い方でも悪い方でもやっかみが生まれる。ただのひがみ、ねたみだが、いじめまでいかなくてもイラつきの発端になる。一度思えばそれは戻ることはない。だから、一人の生徒に肩入れしない。皆に平等に接する。不登校になるのは学校のせいだけではないと思う。親がしっかりと行かせるようにするべきだ。それくらいの強いかわりが必要だ。(女子学生)
- B⑦ 生徒一人一人と教師との関わりを多くして、生徒の些細な変化や助けを求めているしぐさに気づけるようにすることが重要である。また、教師が特定の生徒を特別扱いせず、平等に評価して差別なく接することだと考える。「いじめ」が発生した場合は、それを教師や生徒同士に言える人間関係を築くという環境づくりが大切であると私は考える。(女子学生)

- B⑧ 正直、私は「いじめ」はなくなると考えている。理由は、人は誰かを見下したりして自分が優位に立ちたいと考えてしまうからだ。だから、いじめられている人がいたら、私は教師として、そのことを伝えたいと、その人自身をそのようなくならないことで負けない子に育ててあげたいと思う。(男子学生)
- C① 現代社会に深く根を張ってしまっている「いじめ問題」は、解決するのが難しい。人間が他者を自分とは違う異質なものとして見下し、自分の輪から異質なものを排除しようとする。ここに至るまでには様々な理由があるが、何より大切なのは協調性だと私は考える。「郷に入っては郷に従え」という諺のように、TPOに合わせ、自分の考えを伝えることが大切であると考えている。(男子学生)
- C② 「いじめ」をなくすことは非常に難しい。なぜならば人間とは多種多様な考えをもつものであるから、「いじめ」は起こるものなのである。ではどうすればよいのか。私は「いじめ」が起こってしまった後が重要だと考える。互いに過ちを認めて手を取り合えば、分かり合うことが出来るのではないかと考える。(女子学生)
- C③ 私は教師として、様々な性格をもつ生徒たちにとって、居心地の良いよい「和」の学級づくりを行いたい。「いじめ」や不登校が起きる隙が無いほど、精神的・物理的に常に生徒のそばに在ることを心がける。そして、「日本の子ども」同士として「仲良く」なることをめざす。(男子学生)
- C④ よく「いじめを無くすのは不可能だ」という言葉を耳にする。しかし、「いじめ」が起こっているのを教師は放置しておいてよいのか。いや、良いわけがない。なぜなら、いじめられるから死ぬ、という考えが生まれ、誰かが気づけば救える生命が救えなくなるからだ。では、どうすればいじめは減るのか。私は、一人一人が「いじめを起ささない」と決意し、みんなで協力していくことが重要であると考えている。(男子学生)
- C⑤ 「いじめ」は、娯楽感覚の「いじめ」、ストレス発散の「いじめ」、噂などによる「いじめ」がある。楽しいからいじめる。イライラするからいじめる。アイツとは関わりたくないからなどである。それを防ぐには、その学級にいるだけで楽しく、ストレス発散になっており、クラスの全員が関わり合おうとする学級をつくる必要がある。(男子学生)

4 教職志望学生の生徒指導力を高める「三容器の協力関係」の知恵

(1) 周禮研究会を主宰された高田豊寿先生と「三容器の協力関係」

筆者は東京都公立中学校とお茶の水女子大学附属中学校に合わせて14年間社会科教師として勤務した。教師としての資質能力の向上をめざして、高田豊寿先生¹²⁾が主宰されている周禮研究会に、1981年(昭和56年)6月26日から1988年(昭和63年)年2月13日まで、96回参加して先生の警咳に接することができた。1986年(昭和61年)5月26日の午後2時ごろ、高田先生が何の前ぶれもなく北区立飛鳥中学校¹³⁾に足を運んでくださり、校長先生、教頭先生にお会いして下さっていた。5時限が終わって職員室にもどってこのことを知ったものの、ゆっくりとお話しをする間もなく6時限のチャイムが鳴り、学活の時間が始まった。このままお帰りいただいたのでは申し訳ないし、残念である。そこで、高田先生にわがクラスの生徒を見ていただき、生徒の為になる話をさせていただこう。それがこの場を最も有効に生かすことになると考えて、先生を我がクラスに案内した。

はたして高田先生は、初対面の中学生にどのような話をしてくださるか、私自身楽しみに思いながら2階の教室に先生をご案内した。生徒たちは突然髭のおじいさんが教室に入ってこられたのでびっくり

した様子であった。高田先生は、開口一番「お父さんやお母さんがいらっしやらない人は手を挙げなさい。」とおっしゃって、その生徒のところへさっと寄って行き、しっかりと手を握りしめながら、「お父さんやお母さんがおられなくても、立派に成長することができるのだよ。」と激励してくださった。激励を受けた生徒たちは何ともいえない温かさに包まれて、目頭を熱くしていた。

私は高田先生のこの姿勢に、私の教育者としての姿勢の虚を衝かれた思いであった。なぜなら、不幸にして幼くして親と別れた生徒たちに対しては、同情の思いからそのことには触れまいという消極的な考えが私には根強くあったからである。それに対して、高田先生は最も辛い思いをしている生徒に真っ先に声をかけられたのである。クラスの生徒の前に立った時には、まずその中で最も恵まれない立場にある生徒の味方になること、この共感的理解が生徒指導力の第一歩であることを胸に刻んだのであった。

次に高田先生は、「数学の好きな人は手を挙げなさい」と言われた。しかし、挙手したのが男子1人だけだったので、「では数学がきらいな人」と聞かれると、残りの全員が手を挙げた。これをご覧になった高田先生は「皆さんが今数学がきらいだということでは、このおじいさんが心配になってきます。数学がきちんとできる頭を作っていないと、新幹線や飛行機を安全に運転することができなくなるのです。これからでもいいから、数学を好きになっていこうと思う人はいないか？」と迫られると、おずおずと男子2人が挙手した。

このようなわがクラスの実態を察知された高田先生は、「では、数学が好きになる問題を一つ出していくから、関心のある人は解いて見なさい。」と言って板書されたのが、『塵劫記』の「三容器の協力関係」であった。この間約15分間であった。

(2) 『塵劫記』の「三容器の協力関係」の概要

「いじめ問題」は現代の我が国の学校教育における最も困難な課題の一つである。教職を目指す学生にとって、この問題への生徒指導力を培うことは極めて重要な課題である。私は吉田光由著『塵劫記』(第二版)、寛永8年(1631)にある「三器、或ハ三容器ノ協力関係」と名づけられた算数の問題を学生に提示することによって、「いじめ問題」を解きほぐしていく知恵を修得させたいと考えた。

まず、「三容器の協力関係」とはどういう問題であろうか。ここに大中小の3つの容器があり、それぞれの容量は大「10」・中「7」・小「3」である。今、大の容器に水が(10)入っている。中の容器と小の容器には入っていない。この水を他の容器に移し替えながら、最終的に大の容器に(5)、中の容器に(5)、小の容器に(0)となるようにするには、どうすればよいかという問題である。器にはメモリがついていないので、器に水がいっぱいになったときにはじめて、(7)入ったとか、(3)入ったことがわかる。この問題を学生たちは額を寄せ合いながら考えた。解法が分かった学生たちからは笑顔がこぼれ、まだ解けていない学生に教え合っていた。解法は次の表1.の通りである。学生たちはこの問題を解くことによって、「いじめ問題」に立ち向かうどのような知恵を修得したのでろうか。

表1 「三容器の協力関係」の解法

	大「10」	中「7」	小「3」
0	10	0	0
1	3	7	0
2	3	4	3
3	6	4	0
4	6	1	3
5	9	1	0
6	9	0	1
7	2	7	1
8	2	5	3
9	5	5	0

6

(3) 教職志望学生が「三容器の協力関係」から汲み取った「いじめ問題」に立ち向かう知恵

教育学小論文(800字)の期末試験において、「いじめ問題」と「三容器の協力関係」について論じた答案が、「教職概論」で39名中6名、「教育学概論」で99名中12名あった。「いじめ問題」と「三容器の協力関係」を関連づけて独創的に考察し、有益な知見を得ていると考えた8つの事例を次に紹介する。学生の文章は原文のままで、小見出しは学生の文中のキーワードをもとに筆者がつけた。また、()は筆者が加筆したものである。

① 周りに流されない強い意志を育てる

「三容器の協力関係」というものがある。これは、三つの容器が力を合わせ問題を解き答えを出すというものである。すべて協力し合わなければ答えを出すのは難しい。私は三つの容器の容量が違う(大10、中7、小3)のは、人それぞれ個性があり、同じ人は一人としていないということだととらえた。3人の個性を生かしながら課題を乗り越えていき、答えを出すものだろうと考え、誰一人として空気を乱すようなことはしてはいけないと思った。なぜなら負の連鎖という言葉があり、1つ崩れてしまうとそこから次へ次へと崩れ続けていってしまう。このような関係が人と人の間で起きてしまってはならないのだ。

私は指導法としては、次の4点を強調する。人それぞれに個性があり、思うことや考えることは違うのだから、相手をまず認めることが大切であること。そして人をいじめる前に、自分と相手と比較してみても相手より劣っているところがあるということを見つけること。何を言われてもポジティブに考えることができる力をつけてあげること。例えば「あの子はうるさい」であれば「あの子は元気」など、良い方向にもっていく力である。そして一番大切になってくるのが、周りに流されないという自分の強い意志である。生きていく中で、自分よりも強い人や弱い人というものではできてきてしまうが、それに負けずに立ち向かうという気持ちを忘れさせない、ということが私の指導法である。(総合福祉学部女子学生)

② 役割を共有し平等意識を育てる

悪いことをすると必ず自分に返ってくる、という言葉子どもたちに教えたい。相手が自殺をしてしまうと自分が悪人と周りから言われ、嫌われていく。相手の気持ちを考えずに行動してしまうと、気づかないうちに自分が同じ行動をされてしまう。そして、言い合いになり、「いじめ」に繋がるのである。こうならないためにも、日ごろから子どもたちのことを観察し、グループなどを知っておくことが大切だ。顔の表情、態度、子どものすべての変化を毎日見てあげることが教師の役目だ。

「三容器の協力関係」のように、1度関わっただけでは、その人と同じにはなれないし、知ることもできない。十回、百回と関わることでお互いが平等になれるのだ。(大・中・小の容器は、「水を渡すこと」、「水を受け取ること」、「休んでいること」という3つの役割りを2度、3度……と回数を重ねることによって問題を解決することができる。ここにおいて、容量の大小に関係なく三容器は3つの役割りを共有し合ったという点において平等なのだ。)

毎日の生徒と先生との関わりや、子どもたち同士の関わりが大切になる。関わることによってお互いを理解し、「いじめ」に繋がってしまう何かを未然に子どもたちと解決したい。(総合福祉学部女子学生)

③ 不器用でも優しい人はいる

3人の仲良しグループで、急に仲間外れになってしまうことはよくある。私は、いつも3人組だから

分かるのだ。3人で仲良くすればいい、と先生に言われたこともある。だが、3人だと必ずどちらかの方が話しやすいから好き、と片方の友だちの方に行ってしまう。私はいつもがまんをしていた。大学生になり、新しいグループができて、必ず一人余ってしまうのだ。人間はそうのようにできているのか、と考えてしまう。人は一人を嫌う。だから無理にでも友だちを作ろうとする人もいる。そして、頑張っ
て話を合わせて楽しんでいても、相手にはその頑張りを気づかれてしまうかもしれない。そうすると相手が嫌な思いをして、仲間外れにして、やがて「いじめ」へと進んでしまうこともあるのだ。

「三容器の協力関係」は、3つそれぞれ容量が違うが、違うところを活かして協力していくことなのだ。3しか水が入らないから使えない、ではなく、3入るから10を7に減らせる。というようにたくさん考えて工夫すれば、3つだから出来ることがあるのだ。だからこそ、人間の3人組でも例えば一人が不器用で何もできないとする。だからその子はいらぬ。2人で仲良くする、と考えてしまう人が必ずいるだろう。だが、不器用で何もできなくても優しい人だっている。一緒にいて和ませてくれるかもしれない。だからこそ、人を見ただけで判断してはいけない。人間には必ず一つでも良いところは、あるのだから。(総合福祉学部女子学生)

④ 一人を仲間外れにしたのでは問題解決ができない

「三容器の協力関係」を解くことで、一人を仲間外れにしては解決しないということである。3人の中で一番仲の良い子を独占するために、一人の子に「あいつとは合わない」とか、「あいつのこと嫌い」と言って、3人を2対1に分けようとするのが「いじめ」の発生である。人間の持つ闇を広げて、人を傷つけて自身は幸せになるという考えが心の中に存在している。このような行いは、3つの容器で水を移動させる「三容器の協力関係」が成り立たないのである。そこで教師は、一人にしぼるという行動が必要なのか、と問いかける。これから、沢山話すことで3人で関係を築くこともできるのである。協力関係は2人では成し遂げられないのだ。

いじめが起こる前に教師がその原因を作らないように日頃の学校生活で子どもたちに人間性を育てる話を聞かせていくことが必要である。私は子どもと話し合いのできる教師になる。(総合福祉学部女子学生)

⑤ 3人だからこそできる新たな可能性

三つの容器はすべて水の入る量が異なる。(大の容器には「10」、中の容器には「7」、そして小の容器には「3」が入る。)しかし、3つが協力することで(自身にはない「1」「2」「4」「6」などの)未知の量の水が完成する。このように3人いれば「いじめ」が起きてしまうこともあるが、協力することでできることが多くある。

8 そこで私は、3者間で「いじめ」が起きたら、個々に事情を聴いてから、何か協力してできる課題を与えたいと考える。そして、協力することの大切さ、「いじめ」はやってはいけないということを理解してもらいたい。また、いじめられた子、いじめた子の保護者にも、「いじめ」があった事実を説明することが大事だと考える。「いじめ」は学校の永遠の課題であろう。少しでも「いじめ」がなくなるように教師だけでなく、子どもたちや保護者の意識を高めていく必要があると考える。(総合福祉学部女子学生)

⑥ 人と「協力」して物事に取り組む大切さ

「いじめ」というのはどこから生まれてしまうのだろうか。それは本当にささいなことなのだ。ちょ

っとした言い争いで一人をクラス中や学年全体で省いてしまうのである。よくあるのは、3人の良好な人間関係である。3人だとどうしても一人は二人の後ろでポツンとなってしまうことがある。そこへ誰かが入って行けばその状況が変わるのであろうが、それはなかなか難しい。これが続くと、一人は二人と距離感が遠くなり、「いじめ」へと発展していくのである。

そんな「いじめ」を受けている子や周りの子が救いを求めるのが教師である。教師は勉強を教えるだけでなく、生徒一人一人が過ごしやすい環境をつくるのも使命ではないか。しかし、最近は教師が救いの手を差し伸ばさず、追い詰められて自殺してしまう事件が増えている。「助けてほしい」という叫びは聞こえていたのに看過している。そんなのはもはや教師だと言えないのではないだろうか。

私は「三容器の協力関係」の問題に取り組むことで、今までバラバラだったクラスが一つになっていくのを感じた。この問題から得られたのは、少しのきっかけを与えれば、少しずつ生徒も教師も成長し、さらに良好な関係が出来るのではないだろうか、ということである。

以上のことから私は、「いじめ」が起きたらまずはお互いの意見を聞き、クラスで一つの物事に取り組ませようと考えている。人と「協力」して物事に取り組む大切さがわかれば、一人を省くことが無くなっていくと考える。(人文学部女子学生)

⑦ 他の人が動いてくれているから事が成る

大中小の容器が一つずつある。これらをうまく使用し、10の水を大中に5ずつにするというものだ。これは「いじめ問題」によく似ている構造だ。3人の人間がいて、その中でバランスを失ったときに問題が起きるのが「いじめ問題」だ。「三容器の協力関係」も何か一つでも失えば、何もすることが出来なくなる。(3容器は「水を渡す容器」、「水を受け取る容器」、そして「休んでいる容器」に分かれる。「休んでいる容器」は、他の2つが動いてくれているから目的が達成され、2つの容器は「休んでいる容器」も協力の内にとらえる。)

これをどのように生徒に伝えるかが重要なのである。「実践的指導力」の一つに「人間の成長・発達についての深い理解」という項目がある。生徒たちの中において、仲間とうまくいかないことは多々あることである。それに対して理解することが必要なのである。そして、その時に片方、あるいは両方を叱るのではなく、協力することの大切さを教えることが重要と考えている。この世の中に必要ではない人間はいない。それを教えるのが教師の役目であると私は思っている。

「実践的指導力」の指導力とは、感化力である。人の気持ちを動かせるような指導をしなくてはいけないのだ。このことから私は、「いじめ問題」が起きている場合、怒るのではなく、「協力」することを教え、気持ちを変えさせたい。そのことにより生徒たちを成長させることが出来たら、それほど嬉しいものは他にないと考えたからである。(人文学部男子学生)

⑧ 自己の容量(資質能力)の精一杯を発揮して責任を果たす

私は「いじめ問題」についてまず、「いじめ」というものは恐らく無くなることは無いという前提で考える。小学生から高校生、はたまた社会人まで名は変われども「いじめ」というものは存在し、また、それぞれの解決法は変わってくる。単純なものもあれば複雑なものもあり、すんなりと解決できないものや発覚がしにくいものもある。

あまり言いたくはないが、学校側や教師側の逃げ腰等も「いじめ」における問題点だと思う。このような様々な問題の中で一番重要だと思うのは、「いじめ」における加害者、被害者のどちらにも責任が生じるということである。

「10」と「7」の容器を加害者、「3」の容器を被害者、水の量を責任の量として考える。「5・5・0」の答えにたどり着くまでに、水が移動するたびにそれぞれの責任の重さを教える。3者にそれぞれ責任が存在したということをお教えした上で、最終的には加害者が悪いのだとなる。

「いじめ」の説得として「三容器の協力関係」はかなり使えるものと思えた。「いじめ」を受けたことのある一個人としては、解決法と防止法ともに共通するものとして「リスクを考えさせる」ことが使えると思う。「いじめ」を行うことによって自分にどのようなリスクが生じるか。また、「いじめ」を受け続けることによってどのようなことになるか。このようなことを混ぜた上で「三容器の協力関係」の解決法を使うべきだと思った。(人文学部男子学生)

5 研究のまとめ

「いじめ問題」は、人間社会について回る最も陰湿で解決困難な課題である。しかし、学校社会において発生した問題であるならば、教師が真っ先にこの問題に立ち向かい、児童生徒の学校生活を安心・安全に導く責務がある。このことを可能にする生徒指導力を高めていくことが教師に求められている。教師が発揮する生徒指導力は実践的指導力と言い換えてもよい。実践的指導力とは何らかの形で常に行動となって現れ、教育の実際場面において具体的に示されるものでなければならない。実践的指導力を発揮している教師に見られる姿勢は、現場第一主義である。

学生が「三容器の協力関係」の問題を解くことによって、修得した「いじめ問題」に立ち向かう生徒指導力の知恵とは何であったか。それは以下のような気づきであった。①周りに流されない強い意志を育てる。②役割を共有し平等意識を育てる。③不器用でも優しい人はいる。④一人を仲間外れにしたのでは問題解決ができない。⑤3人だからこそできる新たな可能性。⑥人と「協力」して物事に取り組む大切さ。⑦他の人が動いてくれているから事が成る。⑧自己の容量(資質能力)の精一杯を発揮して責任を果たす。

教職志望学生たちが若い感性で、「三容器の協力関係」に込められた「協力」ということの根本原理と自らの「いじめ」体験を重ね合わせて、「いじめ問題」に立ち向かう生徒指導力の知恵を豊かに汲み取ってくれたことに、筆者は感動し、前途に大きな希望を見出した。学生が1から9までの数字を足し算、引き算する単なる算術問題で終わらせず、この問題に「協力関係」という名前がつけられていることの真義に踏み込んで考察してくれた。このような教育学的解釈を教えてくださいましたのは高田豊寿先生であった。

引用文献・注

10

- 1) 「三器、或ハ三容器ノ協力関係」は、吉田光由著『塵劫記』1631年(寛永8年)第二版、三巻48条本に所収。江戸前期の和算書で中国の『算法統宗』を手本として計量法、計算法などを分かりやすく説明したもの。岩波文庫の大矢真一校注『塵劫記』(1977年)は、寛永20年(1643年)三巻56条本を底本としたものであるが、本書には「三器、或ハ三容器ノ協力関係」は掲載されていない。
- 2) 正課「教職概論」を基盤にした正課外サービスラーニングが、板橋区赤塚支所都市農業係と連携した「農業体験」学習である。また、正課「教育学概論」を基盤にした正課外サービスラーニングが、千葉市中央区生実町内会と連携した「淑徳大・生実町プレーパーク」である。これらのサービスラーニングの初年度の実践記録が、下記の報告書である。
土井進編『平成26年度(2014)淑徳大学「アクティブ・ラーニング」報告書 学生の主体的な地域連携

活動「淑徳大 Together with him (共生)」』創刊号、2015、全56頁

- 3) 正課「教育学概論」へのアクティブ・ラーニングの導入によりどのような学修成果を上げることができたか、それによって教職科目にどのような質的転換をもたらすことができたか、を明らかにしたのが下記の論考である。

土井進「正課内外のアクティブ・ラーニングによる「教育学概論」「教職概論」の質的転換」『淑徳大学教育学部研究年報』創刊号、2015、pp.99-109

- 4) 土井進、越智康詞 [ほか]「いじめ研究会の記録(1)」『信州大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』第5号、1997、pp.261-270

土井進、越智康詞 [ほか]「いじめ研究会の記録(2)」『信州大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』第5号、1997、pp.271-280

土井進、越智康詞 [ほか]「いじめ研究会の記録(3)」『信州大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』第6号、1998、pp.297-306

- 5) 土井進、越智康詞 [ほか]「いじめ研究会の記録(3)」『信州大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』第6号、1998、p.306

- 6) 土井進、守時公枝「教師の「いじめ」早期発見と内面に迫る指導」『信州大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』第5号、1997、p.259

- 7) http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/b1_03_01.html

内閣府平成26年度子ども・若者白書(全体版)(2015年12月12日)

- 8) <http://www.nara-u.ac.jp/CERT/April07/html/chapter1/01.html> (2015年12月10日)

- 9) <http://www.mext.go.jp/ijime/detail/1336269.html> (2015年12月10日)

- 10) 坂本昇一「生徒指導」今野喜清・新井郁男・児島邦宏編『学校教育辞典』(第3版)、教育出版、2014、p.499

- 11) 中川弘泰『感性を育てる教育—いじめ根絶のために—』信州教育出版社、2013、p.88

- 12) 高田豊寿先生(1912-1989)は、埼玉県にある慈恩寺で水野梅暁師の下で難解なインド哲学・仏教哲学の修行に励まれた。その修行を終えて1964年(昭和39年)9月4日に千葉県沼南町高柳に移り住み、1971年(昭和46年)に一人の大学生と共に東京・神田で第1回の周禮研究会を立ち上げられた。それから18年間に約1,200回の講義をされた。講義内容は財政・金融・通信・医学・教育・数学・英語・儒教・仏教など多岐にわたった。板垣退助のような髭と、鋭い眼光、肚の底から発せられるいぶし銀のような声、愛用のステッキと山高帽が先生のシンボルであった。高田先生は、1989年年(平成元年)12月14日に交通事故によりご逝去された。享年77歳であった。先生は昭和天皇の侍従次長であった木下道雄先生(1887-1974)の鞆持ちをされていたご縁で、周禮研究会は皇居和田倉門で開催されることがあった。そのほか学士会館や東京駅八重洲口の会議室、池袋勤労福祉センター等で開催された。周禮研究会とは何を勉強する会かと問われたら、世界を一周しても恥じることのない礼儀を身に付ける勉強会だと答えなさいと言われていた。

土井進『周禮15講—「先生」の教育—』信州大学教育学部、2010、全80頁

- 13) 東京都北区立飛鳥中学校において「三容器の協力関係」を道徳教材として活用した授業記録を、次の実践報告としてまとめた。

土井進「資料の活用をどう行ったらよいか—資料『塵劫記』の「三容器の協力関係」—」『教育技術読本「教職研修」総合特集号』No.23、教育開発研究所、1986、pp.257-263